

茨木市立 豊川小学校 茨木っ子グローイングアップ計画

平成30年10月作成

1

3年間の計画

	目標	平成29年度(2017年度)	平成30年度(2018年度)	平成31年度(2019年度)
中学校ブロック保幼小中連携	<ul style="list-style-type: none"> 基礎的な生活習慣の定着を進めていくとともに、様々な生活体験を通して心豊かに、安心して過ごせる集団をつくり、遊ぶこと、体を動かすことが楽しいと思える子どもを育てる。 校区全体で、つながりを持って取組を展開し、一人も見捨てず、集団づくりと授業づくりの連携のなかで、全ての子どもたちが、違いを認め合い育ち合う集団をつくる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●保、幼、小、中、高、大地域、連携の情報共有発信 ・小中交流を進める。(6年同士の交流(児童会交流会)) ・共通実践を模索する。(同和教育や多文化共生教育) ・保幼小での段差解消に努め、職員同士が学び合う。(相互参観)小プールの解放、給食交流 ・いきいきスクールを活用し、中学校の教員が小学校へ来校し、授業などを行う。 ・合同授業研での柱を再確認し、授業づくりを共に行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ●保、幼、小、中、高、大、地域連携の具体的実践の定着化 ・小中交流会において各校の実践を共通化させていく。共通実践の具体化を進める。 ・委員会や行事における交流を増やし、小中の子どもの出会いから学びを仕組む。 	<ul style="list-style-type: none"> ●校区全体での連携推進 ・高校卒業時点を視野に入れ、豊かな進路選択ができるような、学力・生活習慣の定着。 ・成果と課題の分析。
確かな学力の育成	<ul style="list-style-type: none"> ・聴きあい学びあう子どもを育てる ・あきらめず最後まで学ぼうとする子どもを育てる。 	<ol style="list-style-type: none"> ①授業づくり(学び育ちあう授業づくりの推進)個人研究テーマを持ち、視点や手立てを意識しながら、日常の授業を大切に取組む。また豊川中学校区合同授業研などの研究授業を通して授業づくりの検証を行う。 ②学力の定着を図るために「生活アップ月間」として家庭学習強化月間の取組み。(6月・11月・2月) ③休み時間・放課後に行う学習会(SSR)の実施・定着 ④読書活動の活性化 朝読・ベア読書の推進 保護者ボランティアや梅花女子大学との連携による読み聞かせ活動 ⑤漢字検定【2018年1月27日(土)に実施】 	<ul style="list-style-type: none"> ・成果と課題の分析 課題は次年度へ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・成果と課題の分析
豊かな人間性を育む	<ul style="list-style-type: none"> ・一人ひとりの児童の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高める ・よりよい社会と幸福な人生を自ら創り出していく力を育む ・認め合い、命を大切にすることや自己有用感・自尊感情を育てる ・差別を見抜き行動する力をつける ・自分の中にある差別性に気付く 	<ol style="list-style-type: none"> ①1学期・2学期に集団づくり交流会をもち、教職員全体で全児童の状況把握を行い、今後の手立てを見つける。 ②1・2年生では“セルフケア”を実施し、自己調整や社会的・情緒的能力のスキルを身につける。 ③1年～6年、2年～4年、3年～5年のきょうたい学級の取組みを年間通じて行う。 ④各学年、コミュニケーショントレーニングを朝会の時間を利用して行う。 ⑤教職員で同和問題(部落差別)を深めるための研修を実施各学年、同和教育を深めるため、引き継ぎ資料を残し、全職員で実施計画を確認する。 ⑥キャリア教育を各学年すすめる。 ⑦多文化共生教育を郡山小学校と連携しながら模索 ⑧障害理解教育を深めるための研修を実施 	<ol style="list-style-type: none"> ①集団づくり交流会の実施 ②セルフケアの実施と検証 ③きょうたい学級の取組み ④コミュニケーショントレーニングの実施 ⑤同和問題(部落差別)の職員研修を実施 ⑥キャリア教育の実施 ⑦多文化共生教育の実践 ⑧障害理解教育の実施 ⑨性に関する指導、男女共生教育を各学年系統立てて進める <ul style="list-style-type: none"> ・授業案などの成果物の検討 ・成果と課題の分析 課題は次年度へ 	<ol style="list-style-type: none"> ①集団づくり交流会の実施 ②セルフケアの実施と検証 ③きょうたい学級の取組み ④コミュニケーショントレーニングの実施 ⑤同和問題(部落差別)の職員研修を実施 ⑥キャリア教育の実施 ⑦多文化共生教育の実践 ⑧障害理解教育の実施 ⑨性に関する指導、男女共生教育を各学年系統立てて進める <ul style="list-style-type: none"> ・授業案などの成果物を作成 ・成果と課題の分析 課題は次年度へ
健康体力の増進	<ul style="list-style-type: none"> ・体を動かすことが楽しく、好きになる子どもを育てる。 	<ol style="list-style-type: none"> ①授業づくり 授業内容の検討および、体力向上に向けた取組み交流を定例の学力保障委員会で行う。 ②全校で取り組むこととしてとよかわラリー ・休み時間の全校運動タイム マラソン大会 なわとびタイム ・休み時間の短縄とび・大縄跳び ③遊びを通して委員会やベア学級などを利用して、体を動かすゲームを行う。 ④カリキュラムづくり ⑤放課後の運動場開放 	<ul style="list-style-type: none"> ○29年度に実施した項目について、検証し見直して推進していく。 ○カリキュラムの検討 豊川中学校区としてのカリキュラム作成に向けて、郡山小学校と検討会をもち作成を進める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・成果と課題の分析
支援教育の充実				

2

今年度の結果と取組みについて

(1) 全国学力・学習状況調査

○●国語●○

国語A

(領域ごと)

- ①話すこと・聞くこと
概ね良好な結果であった
- ②書くこと
概ね良好な結果であった
- ③読むこと
やや課題が残る結果であった
- ④言語事項
やや課題が残る結果であった

(問題形式)

- ①選択式
やや課題が残る結果であった
- ②短答式
課題が残る結果であった

(無解答率)

やや課題が残る結果であった

(その他)

学校の特徴的なことについて記入

- ・正答率の高かった領域
①話すこと・聞くこと
- ・全国平均と比べてもっとも正答率の低かった設問
【春休みの出来事の一部】の中で、つながりが合っていない文を選択し、正しく書き直す
- ・無解答率が高い設問
漢字の書き取り5問

国語B

(領域ごと)

- ①話すこと・聞くこと
概ね良好な結果であった
- ②書くこと
概ね良好な結果であった
- ③読むこと
概ね良好な結果であった

(問題形式)

- ①選択式
概ね良好な結果であった
- ②記述式
概ね良好な結果であった

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

学校の特徴的なことについて記入

- ・正答率の高かった領域
③読むこと
- ・全国平均と比べてもっとも正答率の高かった設問
推薦するためには、他のものと比較して書くことで、よさが伝わることを捉える
- ・全国平均と比べてもっとも正答率の低かった設問
目的や意図に応じ、内容の中心を明確にして、詳しく書く

分析

例年本校では、漢字の書き取り・読み取りの正答率が最も高い。これは2年生から国語辞典をそばに置いて、言葉への興味・関心を持たせることに取り組んでいることや、毎年3学期に実施している漢字検定受検の取組みの成果であると考えている。しかし、残念ながら今年度の漢字の書き取り・読み取りの正答率は高くなかった。これは漢字の設問が国語Aの最終部分にあり、一つ前の設問である「主語と述語との関係などに注意して文を正しく書き直す」の問いの正答率が最も低いことから、この問題に時間がかかりすぎたために最終の問題にまで達しなかったと考えられる。

また国語Bでは、全般的に概ね良好な結果となった。特に「推薦するためには、他のものと比較して書くことで、よさが伝わることを捉える」設問は正答率が高く大変良好な結果であった。様々な教科において「ふりかえる活動」を丁寧に行い、自分と友だちとの表現の違いにこだわって授業改善を進めてきた結果であると考えている。さらに、国語A国語Bともに「①話す・聞く」の領域の正答率が高かったことは、『聴き合い学び合う授業づくり』を校内で丁寧に進めてきた結果であると考えている。

一方で、国語B「目的や意図に応じ、内容の中心を明確にして、詳しく書く」設問は正答率が低かった。これは、50字から80字という字数制限が設けられた設問であり、普段の授業ではあまり経験していないことが要因と考えられる。書く事に慣れ始めている児童も増えているので、短い言葉で端的に表すような活動も意識して学習活動の中に取り入れていきたい。

算数

算数A

(領域ごと)

①数と計算

概ね良好な結果であった

②量と測定

良好な結果であった

③図形

概ね良好な結果であった

④数量関係

概ね良好な結果であった

(問題形式)

①選択式

良好な結果であった

②短答式

概ね良好な結果であった

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

学校の特徴的なことについて記入

- ・全国平均と比べてもっとも正答率の高かった領域
②量と測定
- ・全国平均と比べてもっとも正答率の低かった領域
④数量関係
- ・全国平均との差がもっとも大きかった設問
▼針金0.2mの重さと針金0.1mの重さを書く
◎円周率を求める式として正しいものを選ぶ

算数B

(領域ごと)

①数と計算

良好な結果であった

②量と測定

良好な結果であった

③図形

概ね良好な結果であった

④数量関係

概ね良好な結果であった

(問題形式)

①選択式

やや課題が残る結果であった

②短答式

良好な結果であった

③記述式

良好な結果であった

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

学校の特徴的なことについて記入

- ・全国平均と比べてもっとも正答率の高かった領域
③量と測定
- ・全国平均と比べてもっとも正答率の低かった領域
④数量関係
- ・全国平均との差がもっとも大きかった設問
▼一つの事柄について表した棒グラフと帯グラフから読み取ることができることをまとめた文章に当てはまるものを選ぶ
◎横に並んでいる七つの数について、示された表現方法を適用して書く

分析

算数A・算数Bでは、全ての領域において全国平均を上回り、全般的に概ね良好な結果となった。特に算数A「③図形」の領域「円周率を求める式として正しいものを選ぶ」設問では全国平均を大きく上回る結果となった。これは、普段から式の意味を考え自分の言葉で説明することを繰り返してきた結果であると考えられる。さらに今年度は、記述式の問題の正答率も全国平均を大きく上回った。昨年度までは、年々改善傾向にはあるものの苦手としている児童も多くやや課題が残る結果も見られていた。そこで数年前より基礎の習得とともに発展的な課題にも数多くチャレンジし、その内容を言語化して説明することにより、算数を本質的に理解しようとする児童も増えた。その結果が見られるかたちとなった。

一方で「④数量関係」の領域は、算数A・算数Bともに正答率が低い設問がありやや課題が見られた。「除法で表すことができる二つの数量の関係を理解している」設問は基礎的ではあるものの全国平均を下回った。これは、数直線などを使って問題解決する活動は多く設定しているが、子どもが自ら活用するには至っていないことが要因としてあげられる。

今年度までの結果を踏まえ、本校では数学的な価値を味わえる課題の設定をより意識し、子どもが学びたいと思えるような良問との出会いを多く持ちたいと考える。

苦手意識のある応用問題においても、無解答率は低く、最後まであきらめずやり抜く力がついてきている。さらに、児童質問紙において「算数が好きか」の質問項目において全国平均を大きく上回っていることから、本校で大切に進められている『聴き合い学び合う授業づくり』が定着し、子どもたちに学びたいという意欲が高まってきている結果であると考えられる。

理科

理科

(領域ごと)

①物質

やや課題が残る結果であった

②エネルギー

概ね良好な結果であった

③生命

やや課題が残る結果であった

④地球

やや課題が残る結果であった

(問題形式)

①選択式

やや課題が残る結果であった

②短答式

概ね良好な結果であった

③記述式

やや課題が残る結果であった

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

もっとも正答率の高かった設問は

①エネルギー

もっとも正答率の低かった設問は

②物質

もっとも全国平均との差が大きかった設問

▼食塩水を熱したときの食塩の蒸発について、実験を通して導きだす結論を書く

◎回路を流れる電流の向きと大きさについて、実験結果から考え直した内容を選ぶ

分析

理科では、区分ごとに大きな正答率に差が出る結果となった。エネルギーの区分に関しては概ね良好な結果となったが、物質・生命・地球の区分では課題が残る結果となった。

物質区分では、「食塩水を熱したときの水の蒸発について、実験を通して導きだす結論を書く」設問では、実験結果からのみ言及できる内容に書き直す作業が必要であったが対応できず正答率が低くなったと考える。そこで授業では、目で見える実験結果だけの交流にとどめず、そこから考えられることや文章化された友だちの表現を比較することなどを取り入れて学習を深めていきたい。

生命区分の「人の腕が曲がる仕組みについて、示された模型を使って説明できる内容を選ぶ」設問では人の腕が曲がる仕組みを模型に適用できるかが問われている。人体模型などを用いて知識をほかの場面に適用するなど具体的な活動を通して学習することはもちろんだが、解決したい問題についての予想や仮説をたてる場面などでも模型を活用させたい。

地球区分の「上流側の雲の様子や雨の降っている所と下流側の川の水位の変化から、上流側の天気と下流側の水位の関係について言えることを選ぶ」設問では、より妥当な考えをつくりだすために、複数の情報を関係付けながら、分析して考察することが求められている。現在スマートフォンなどでも簡単に得られる情報を自分の必要な情報に関連付けて考えることはこれから生きる子どもたちにとってつけたい力の一つである。そのためには ICT を活用しながら理科の授業をつくっていく必要があると考える。

○●経年比較●○

全体的な傾向についての分析

算数は、A・B問題の正答率が比較的高く、学習の定着がみられた。また「算数が好きか」の質問項目において全国平均を大きく上回っており、本校で進めている『聴き合い学び合う授業づくり』の成果がみられたことが分かった。

国語科は全国平均に迫っており、確実に力がついてきている。やや課題が見られる面もあったが、全般的には概ね良好な結果となった。

理科も年々正答率が向上している。実験など体験的な活動を繰り返し行ってきた成果であると考えられる。

学力高位層と学力低位層、エンパワー層についての分析

これまでの結果を近似曲線で分析すると、学力高位層は、増加しており、学力低位層は減少している。学校として、ペア学習やグループ学習を取り入れた学習形態や低学年からの学力保障や家庭学習の定着度を上げる取組みなどが、学習に対する意欲や関心につながってきているものと考えられる。

また、中学校区として保幼小中連携をきめ細やかにい子どもの実態交流から課題の把握を丁寧に行っている。このような取組みも本校の学力保障に大きく寄与していると考えられる。

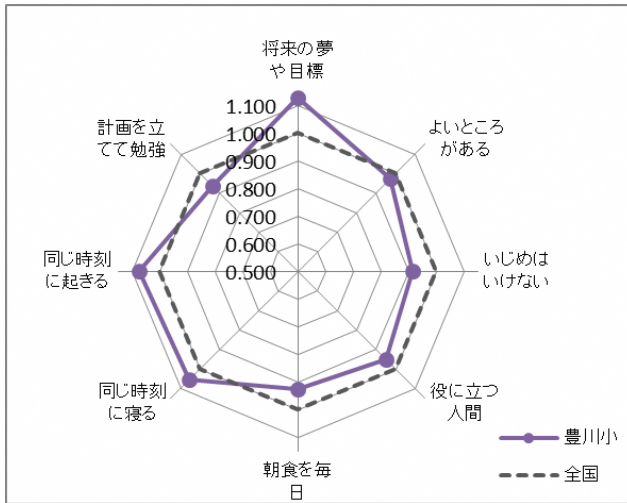
○●取組み●○

学力向上に関する取組み

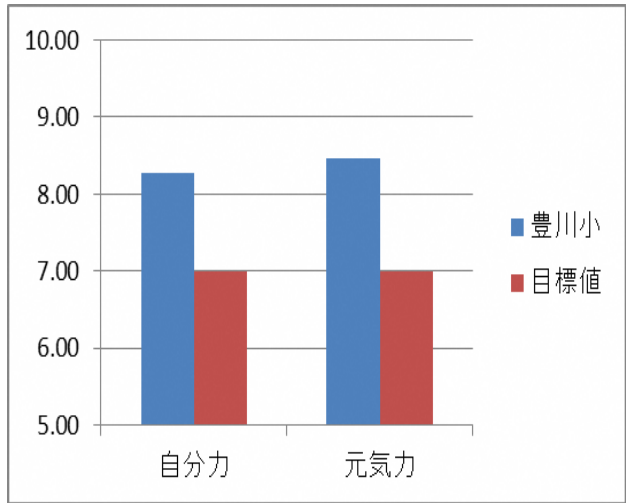
- 授業づくり・・・1年間を通して、子どもの姿から授業者が学ぶことを大切にする。
「聴き合い学び合う授業づくり」として豊川中学校区で取り組んでいる、ペアやグループ活動を通して全員が参加し考えられる授業づくりに取り組む。
中学校区での研究会や校内での研究会などにおける話し合いを大事にして、授業力を伸ばし子どもたちが意欲的に取り組める授業をめざす。
- 家庭学習・・・生活アップ月間として年3回（6月、11月、2月）家庭学習を重点的に取り組む期間として、家庭や子どもたちに意識を促す。
25分休み、昼休み、放課後の補充学習は、学生や学習サポーターとともに日常的に行い、宿題でできていないところや授業で最後までできなかった問題等を最後までやりきれるように支援する。「宿題は丁寧に家でする」を少しずつでも定着させたい。
- 読書活動・・・週2回の朝読は、教師も一緒に読書をして読む環境をつくる。
特に木曜日の朝読は、校内で共有できるよう同じ図書を使って「ペア読書」を行った後、言語活動を意識して内容について感想や意見を交流する。
図書館支援員とともに、より図書館利用が広まり、本を好きになる子どもたちが増えるように教室や図書室の環境を整える。
大学生やボランティア、保護者の読み聞かせなどにも今まで同様取り組んでいく。
- 漢字検定・・・3学期に実施する。保護者や地域の方にも呼びかける。
- 豊川スタンダード・学校生活や授業に関して、共通して理解しておくことを明文化したり視覚化したりして整えていく。
- 学習室の開放・・・授業で分からなかったところや課題が残っている児童を支援する。（25分・昼休み）放課後は、算数の宿題を中心に支援する。
- 教材の拡充・・・業務サポーターの協力を得ながら、具体物を使った授業を行うための教材の作成を行っている。複数の学年で活用できるように工夫している。
- その他・・・子どもたちの実態を常に考慮しながら、学校生活を支え「学びたいという意欲」をつけていく。そのために、支援員、サポーター、ボランティア、SSWなどと協力して取り組むとともに、地域、豊川ネットとの連携も大切にする。

○●子どもたちに育みたい力●○

5つの力 全国平均との比較



5つの力 目標値との比較



今年度は質問紙項目が大幅に変更になったため、5つの力をこれまでどおり算出することができませんでした。そのため、全国平均との比較(レーダーチャート)は8項目、目標値との比較(棒グラフ)は、3項目とも実施した『自分力』と『元気力』のみとなっています。

分析

今年度より新しい5つの力で、経年比較することとなった。茨木市が定める目標値は達成できているが、全国平均と比べると、やや課題がある項目が多い。特に、「計画を立てて勉強する」や、「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」などの項目が低い。「計画を立てて勉強する」は、放課後の学習室の開放や、生活アップ月間の取組みなどから家庭学習は定着しつつあるが、それ以外の学習や長期的な見通しをもって学習することには、これまで意識させることが少なかった。引き続き家庭にも呼び掛けて年間を通した見通しや目標設定ができるよう取り組んでいきたい。

また「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」は、自分に自信が持てていない児童が多いことが要因であり、これからも引き続き自尊感情を高めていくことが必要である。そのためには「聴き合い学び合う授業づくり」を基盤とした日々の授業づくりを丁寧に行う必要がある。ペア学習や班学習を通して自己有用感が得られ、安心して学習する雰囲気がつくりだされることが期待できる。これからも継続して取り組むことが必要であると考える。

一方で「同じ時刻に寝る」・「同じ時刻に起きる」の項目は全国平均を上回った。これは、生活アップ月間の取組みなどの成果である。さらに「将来の夢や目標を持っていますか」の項目も全国平均を大きく上回った。これは本校で系統立てて人権総合学習や道徳科の学習に取り組んだ結果である。これからも引き続き子どもたちの「豊かな人権感覚」と「確かな学力」の育成とともに、安心できる学校や地域をつくっていききたい。

取組み

・集団づくり

人間関係づくりのスキルを身につけ、自分の思いを出し合い、一人ひとりの思いを聴きあえる人間関係を築いていく中で、学力を保障していく。またどの子も安心していきいきと活動できる集団づくりをめざしていく。

1. 2年生「セルフケア」

全学年 「コミュニケーショントレーニング」「人権総合学習」
「なかまづくり」「友だちつくろう月間」など

・基本的な生活習慣の定着

集団登校の支援
年3回の「生活アップ月間」での生活の見直し、点検
家庭学習の推進

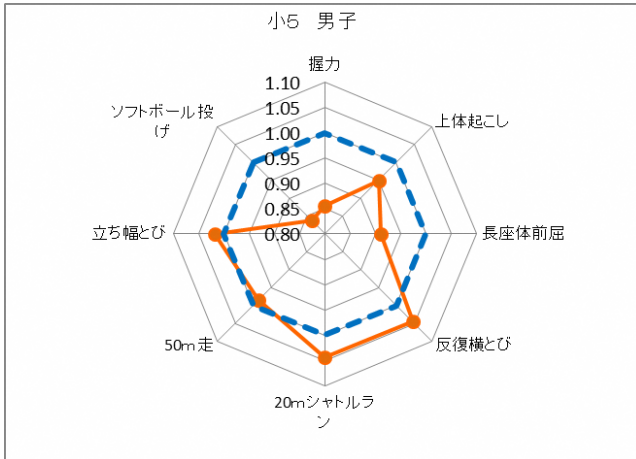
・ペア学級や縦わりグループの活用

ペア学級での集団遊びや学習、縦わりグループでの全校遠足など、異年齢でのつながりもつくる。

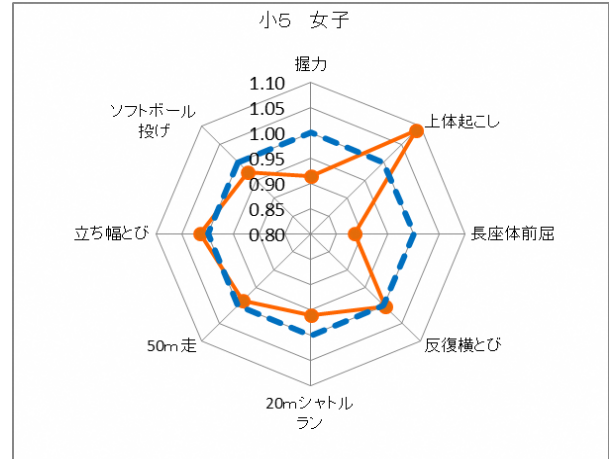
(2) 全国体力・運動能力、生活習慣調査

○●体力●○

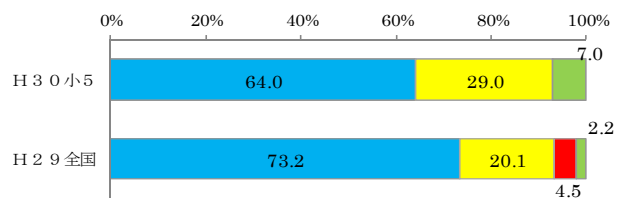
男子 (小5)



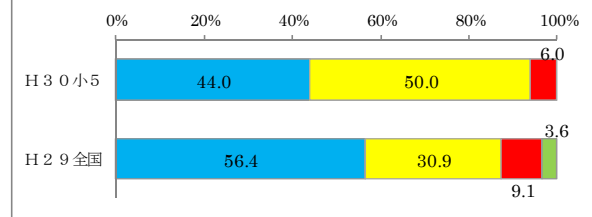
女子 (小5)



運動・スポーツが好きですか(小5男子)



運動・スポーツが好きですか(小5女子)



■好き ■やや好き ■好きじゃない ■好きじゃない

分析

今年度は、20mシャトルランが男女ともに4年生時よりも大きく数値を伸ばす結果となった。これは普段の授業の中で運動量を確保したり、マラソンなどで持久力を伸ばす活動を学校全体として取り組んだ成果であると考えられる。また反復横とびも大きな伸びが見られた。これはジグザグダッシュやラダーなど俊敏性が高められる運動を校内で設定し、行ってきた成果が見られたものである。

しかし、ソフトボール投げや握力では、全国平均と比べて大幅に下回る結果となった。これは握力が弱いことがソフトボール投げの数値の低下につながっていると考える。普段の遊びが固定化され、ボールを投げる経験が少なくなっていることが要因であると考えられる。

本校では子どもたちの体力の向上をめざし、休み時間を利用した「とよかわラリー」や、「なわとびタイム」などの活動を行っている。その成果として、子どもたちの体力が全国平均値に近づいてきているため、今後も継続して行いたい。また今年度は、今回数値が低かったソフトボール投げや握力の向上をめざし、ボールを使った種目を多く取り入れる予定である。子どもの実態を把握し、課題を明確にしながらいずれも種目を検討していきたい。

取組み

- 授業の中では、子どもたちの運動の特性を知り、体ほぐし運動を毎時間取り入れて体づくりを行う。体幹を鍛えることも考慮する。
- 遊び、集団活動の中で、体を動かすことが楽しいと思える活動を取り入れる。
- とよかわラリーの実施
 - 休み時間の体力向上に向けた記録会 (木曜 25分休み)
 - 50m走 幅跳び 縄跳び 鉄棒 うんてい のぼり棒、バランスボード、ジグザグダッシュ フラフープ ボール投げ ラダー
- マラソン大会 ○なわとびタイム ○なわとびの推進 (ジャンピングボード)
- 放課後の運動場の開放 (下校時刻)